

Title	デンマーク語の/r/ : 標準(口)語とは何か
Author(s)	間瀬, 英夫
Citation	大阪外国語大学学報. 30 p.61-p.71
Issue Date	1974-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80507
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

デンマーク語の /r/

—標準（口）語とは何か—

間 瀬 英 夫

Det danske /r/

Hideo Mase

I en variation af rigsmål (RM) findes der ustemt *r*, der forekommer mellem kortvokal og /f, s/ eller skrevet *p, t, k*. Hvis beskrivelsen er rigtig, bevises derved 'regressiv' stemthedsassimilation, som ellers næppe findes i dansk. Ved kronologisk at følge adskillige beskrivelser om ustemt *r*, overvejes her begrebet om rigsmål.

§1.1. デンマーク語の /r/ が短母音と /f, s/ あるいは書記形 *p, t, k* の間に現われるとき無声化することが或る種の「標準（口）語」(RM)にあると言われる。これが音声的事実ならば、「声」の逆行同化を示す例となる。この /r/ の無声化に関する記述を年代順に追いながら、併せて標準語とは何かを考えてみたい。

§1.2. ここでは「同化」を原則として音韻的対立をもたらさない共時的音声現象として考える。デンマーク語にもいくつかの種類の同化現象がみられる。調音上の同化としては、進行同化（例：*kop* + (*p*)*en* → [ˈkɔbm]）も逆行同化（例：*hind* + *bær* → [ˈhembæp]）もある。この種の同化は、子音間では口音性子音と鼻音性子音の間でもっともよくみられる。子音と母音の間の同化現象としては、何と言っても /r/ の隣接母音に対する影響がもっとも顕著である。一般に、/r/ の後に来る狭母音を除いた前舌母音、/r/ の前に来る広母音、半広母音はより開口あるいは後寄りとなる。この /r/ の影響の程度は、より保守的な「標準語」に対してよりも、より新しい、より進歩的な「標準語」に対しての方が強く、かつ規則的である。/r/ に隣接する母音の異音の分析・記述はデンマーク語音韻論の中心的問題の一つとなっている。⁽¹⁾

§1.3. 「声」(voice) の同化として、無声子音は有声音間で有声化する。これは特に母音間の

(1) 詳しくは、例えば Andersen (1954); Hansen (1956); Fischer-Jørgensen (1962); Ege (1965); Rischel (1968); Basbøll (1968; 1971; 1972) 参照。

/h/ に言えることであるが、無気・無声の /b, d, g/ にも屢々起る。/f/ は有声化することは稀で、/s/ は常に無声である。⁽²⁾ この有声化は二つの有声音の間に起るのであるから、相互同化の一種であろう。

§1.4.1. 有声音が無声化する第一の場合は、(半)強音節中の頭子音連結で、有気・無声の /p, t, k/ 及び無声の /f, s/ の後に起る有声音は無声化するというものである。しかし、有声(子)音及び無気・無声の /b, d, g/ の後に起る有声音は無声化しない。⁽³⁾ この声の同化は明きらかに進行同化である。

Jespersen (¹1906; ³1934)⁽⁴⁾ 及び DO (= *Ordbog over det danske sprog* (1918—1956)) では、[p, k] の後の [l, n], [p, t, k, f] の後の [r] が無声化されると言われるだけである。⁽⁵⁾ この記述をみると、有気閉鎖音 [p, t, k] の後で [r] は無声化されるのに、[l, n] は [t] の後で無声化されないという印象を与えかねない。しかし、事実は /tl/ /tn/ は音節頭連結としても音節末連結としてもみられないのである。Jespersen 第一版にはないが、第三版には「音韻論の概観」(第XVI章) があり、そこで実在する子音連結が示されている。しかし、Jespersen では音素の分析・記述はなされていない。(DO も同じ。)

音節頭子音連結で /p, t, k, f, s/ + 有声音音素の実際に現われるものを示すと、次のようになる。(下線を施した連結は、Jespersen (及び DO) でもその連結中の有声音が無声化すると示されるもの。)

$\begin{array}{c} \diagup 2 \\ 1 \diagdown \end{array}$	l	r	m	n	v
p	<u>pl-</u>	<u>pr-</u>	—	(<u>pn-</u>)	—
t	—	<u>tr-</u>	—	—	tv-
k	<u>kl-</u>	<u>kr-</u>	—	<u>kn-</u>	kv-
f	<u>fl-</u>	<u>fr-</u>	—	<u>fn-</u>	—
s	<u>sl-</u>	—	sm-	sn-	sv-

/pn-/ は *pneu 'matisk* (DO) のような外来語にのみ現われる。下線を施してない連結中では、当時無声化は起らなかったのかもしれないが、現今では全て無声化されるであろう。因に Jesper-

(2) Fischer-Jørgensen (1952) 及び、拙論 (1973), 特に pp. 8—10 及び註14 参照。

(3) 拙論 (1973) §2.3., 2.4. 参照。

(4) Jespersen よりの参照箇所については、セミコロンの左側が第一版より、右側が第三版よりとする。

(5) 発音記号に関しては、原著に用いられている記号を用いる。そのため、同一語が異なる記号で表記されることがあることに注意。無声の *r* を表記するのに Jespersen は第一版では [r̥], 第三版では [r̥] を用いるが、ここでは [r̥] に統一する。特に原著からの引用でない場合は Basbøll (1968), Rischel (1968) に準拠した I.P.A. 記号を用いる。語例には、主として普通の綴字を用いるが、stød の表示が特に必要と思われるときには、綴字中に ' を付す。

sen (§67; §6.6₁) は *p, t, k* の後の *l, j, n* の完全な無声化はコペンハーゲン [方言?] でもっとも一般的である、と言う。Jespersen 及び DO で示されていない無声化の例を Andersen (1954) から示してみる: *flaske* (p.349), *slo'* (347), *smile* (348), *fnyse* (348), *tvist* (344), *kværn* (348), *svinge* (345)。尚, /sn-/ の /n/ が無声化する例は Andersen を一通りみた限りでは発見出来なかったが, Andersen (p.348), Hansen (p.80) など、この環境の /n/ が無声化すると記述されている。

§1.4.2. 有声音が無声化する第二の場合は、発話中の休止の前に現われる有声音に起るものであるが、常に起るとは限らないようである。休止直前の強音節中で、開音節中の短母音 (*vi, nu, da*), 及び、母音あるいは *stød* を伴う子音に後続する音節末 (ここでは語末に同じ) 有声音は無声化する。短母音の後: *vel, kar, ham* (pron.), *ven, dag*; 長母音の後 (この条件での長母音は通常 *stød* を伴う): *li'm, ste'n, so'l, ste'd*; *stød* を伴う有声音の後 (この場合、先行母音は短母音): *hal'm, vør'n, hav'n* (*av*=[au]), *eg'n* (*eg*=[ai])。

この第二の無声化は調音活動の停止直前で起るわけで、今まで述べてきた声の同化とは異なる。他の同化は休止の前という特別な条件をもっていない。それ故、この休止の前の無声化は別に扱った方がよいと思われる。尚、以下では、休止前、語末の無声化はとり上げない。⁽⁶⁾

§1.5. 声の逆行同化による有聲 (子) 音の無声化はあるだろうか。Spore (1965, §37) は *falk* [fal'g] の *l* はその後『*stød* があるにもかかわらず』無声化するという。[g] は無気無声 [g̥]。(Hansen にも類似の記述があるが、これについては註15参照。) もしこれが事実であるならば、後述するように「本来の」無声音の前の無声化ということになる。しかし、一般に、逆行同化と思われる記述は全然示されないか、示されても *r* の無声化だけである。では、声の逆行同化による (?) *r* の無声化とはどのようなものであろうか。

§2.1.1. 無声の *r* について、Jespersen (§65; §6.4₁) は次のように言う。

r は他の有声音と異なり、[強音節中の] 短母音と無声 (“pustet”) 子音の間で無声化することになるが、一部の人の発音に起る。(注意: この場合、無声 (“pustet”) 子音は字母 *p, t, k, f, s(j)* で表わされるもの。) 例えば、*skærpe, værft, sjærf* (*skærf*), *vers, marsj* (*marsch*), *mærk, kort, bort* などの語で。

Jespersen は続ける。ここで注目すべきことは、語中で本来の *t* と *d* の間の [音声的・音韻的] 差異が普通の発音では失なわれているが、その名残りが [本来の] *t/d* に先行する短母音の後の *r* に現われることがある。例えば、以下の語対を比較されたい (母音発音記号は第三版のもの):

(6) これに関しては、拙論 (1973) 参照。

værten [værdn] – [værdn] *verden*,
kortene [kɔrdn-ə] – [kɔrdinə] *korderne*

又、これと類似のものに次のような例がある。

harpe [haɾbə] – [harbo'.] *Harbo*,
sparke [sbaɾgə] – [kargo] *kargo*.

しかし、長母音の後では、たとえ字母「前述「本来の」に同じ」*p, t, k*の前でも *r* は有声であるばかりでなく、屢々母音的となる。例えば *borte* [bɑ·rdə]。しかしながら、この音環境における無声の [r] は現在消失しつつある。この音は特に力を込めた発音のみに現われ、弱音節には現われない。大部分の人は凡ゆる場合に有声の [r] を用いる。しかし、この場合でも *r* 音に長さの差異が現われ得る。即ち、[r] は本来の [b, d, g] の前における方が、本来の [p, t, k] の前におけるより長い。([p, t, k], [b, d, g] の [] は Jespersen 自身による。)

以上 Jespersen が [r] について述べるところであるが、ここで重要なことは、「本来の」*p/b, t/d, k/g* の差異が失われて先行の *r* に現われているということであるが、別の所 (§71; §6.7₄) ではこれらの閉鎖音自身にも (音韻的(?)) 音声的差異があるとする場合があるようである。そこでは綴字 *ptk/bdg* と発音の関係が述べられており、語頭以外では両列閉鎖音の対立は通常失われるが、[m, n, ŋ, r, l] の後では *ptk/bdg* の発音は動揺する。多 く の 人 は *ptk* と *bdg* を区別する。例えば、

kæntre [kæntɾə] – [æn·drə] *ændre*,
lampe [lampə] – [jambə] *jambe*.

しかし、他 の 人 々 は [kændrə, lambə] と発音する。同様に、*vente, vælte* の *t* は [t] または [d], *tænke* の *k* は [k] または [g]。以上のように述べている。

§2.1.2. 唯一の発音記号つき辞書である DO でも大体同じ記述がなされている。というより、第28巻 (pp. 94—97) の発音記号表及び説明文を見れば明白であるが、DO は Jespersen に従っているのである。いずれにしろ、Diderichsen (1957) が鋭く批判するように、DO の音声記述は一貫性に欠けている。⁽⁷⁾ これはいずれ明きらかにするが、編纂に三十年近くかかったということが主たる原因ではない。

(7) Diderichsen は、DO の音声記述・表記全体にわたって一貫性に欠けること、事実(?)と一致しないことを鋭く批判している。DO の発音記号を参照する場合には、Diderichsen を精読する必要がある。尚、同論文は現在でも抜刷として J. H. Schultz Forlag, København から求められる。

DO によれば (Jespersen と同じわけなのだが), 無声の [r] は強音節中の短母音 + r + [f, s] あるいは字母 *p, t, k* の時に起り, その他の場合には有声の [r] が現われる。又, 有声子音に続く字母 *ptk/bdg* における発音についても Jespersen と同じことが言われ, 実践されている。

Jespersen になく DO 特有の表記に斜字体の [*b, d, g*], [*l, r, n*] ([*m*] 及びその他の子音にはない) である。これは [*b, d, g*] に関しては有気音または無気音 (注意: 両者とも無声) が, [*l, r, n*] に関しては有声音または無声音が当該位置に現われることを示す。例えば, *martre* は [*ˈmɛɾdrə*]。これ以上には説明がないので, 例えば上述の語の *-tr-* の部分は, (1)[*dr*], (2) [*tr*], (3) [*dɾ*], (4) [*tɾ*] の四通りが考えられるが, 実際は(1)と(4)のつもりなのであろう。

§2.2.1. 母音的 *r* については, Jespersen (§102; §9.5₂) は次のように述べる。

[ə] は *r* に隣接するとき, 非常に広口の [ə] となる。例えば *Karen, fader* は [*ka·rən, fa·ðər*] となる [いずれにしろ *fader* は *fa (de)r*, 即ち [*fa:*] が普通]。しかし, 普通は [ə] と [r] は融合して「母音的 *r*」([ɹ]) を形成する。この音は子音的 [r] とくらべ, 舌と咽頭壁と軟口蓋の間が広いこと, 全体として筋肉が弛んでいることによって特徴づけられる。この母音的 [ɹ] は [*ka·ɹn, fa·ðɹ*] のような場合の他に *-rer* にも現われる: 例えば, *grosserer*。そして長母音の後の *r* に非常によく現われる: 例えば, *bo'rd, bo'er* (この二語は同じ発音), *ko'rn, tå'rn, farlig*。以上のことは第一版, 第三版とも同じであるが, *hjerne* の *r* は第一版 (§101) では [r], 第三版 (§9.4₂) では [ɹ]。しかし, *vejr, göre, smøre* は第三版も [r]。(ついでながら, *hør* [亜麻], *gør* は第三版も [r]。)

§2.2.2. DO では母音的 [ɹ] は, *lærer* [*læ·rər*] あるいは [*læ·(r)ɹ*], *grosserer* などの *-rer* に現われるものに限っている。つまり事実上殆んど用いられていない。

§3.1. §2.1. で示した Jespersen 及び DO の記述する無声の [r] はどの程度一般的なのであろうか。Jespersen も DO も問題の環境で [r] が必ず起ると言っているわけではない。

Grove (1927, p. 156) によれば,⁽⁸⁾ この [r] は RM⁽⁹⁾ には現われないもので, 恐らく方言音か綴字発音であろう, と言う。Hansen (p. 79), Diderichsen (p. 62 f) は, *værten, kortene* など

(8) Grove は Jespersen 教授にのみ言及。(DOは1956年に完成。) Uldall (1928) によれば, Jespersen は Randers に生まれたからそのような記述をするのだらうと Grove は言うが, そうではなくてより古い世代の発音を Jespersen は受けている, とのことである。

(9) デンマーク語で, *rigsmål, rigssprog, rigsdansk* というのは「国語」(文語・口語)の意で, 「方言」の意はない。つまり, いわゆる「標準語」を指すのであるが, ここで問題としていることの一つに標準口語とは何かということがある。そのため, 「標準語」という表現を避けて, *rigsmål* の省略形としての RMを用いる。

の [r] はユトランド (生れ) の RM (の話手) の特徴で、コペンハーゲンを初め、その他の非ユトランドRM にはないとする。つまり、少なくともコペンハーゲン RM では大体否定されるようだが、この「ユトランド的」(?) [r] : [r] はコペンハーゲン RM では跡かたもなくなってしまっているのだろうか。

音韻論を扱っている Hjelmslev (1951), Basbøll (1972) など、この音声的 (・音韻的) 差異が「保守的な」コペンハーゲン RM に存在すると考えていることは確かである。「進歩的な」RM には、後述するように、種々の音韻・音声的事実からこの差異はないと言ってよいが、当座は「保守的な」RM を対象にして、問題の /r/ が音声・音韻的に、又、その他の点でどのような状態にあるかみてみたい。

§3.2. 形態論的には、*værten* は *vært* [主人] に後置(定)冠詞 (単数形) *-en* のついた形であり、*verden* [世界] の *en* は語源的には上例におけると同様の冠詞であるが、共時的には *verden* で一語である。又、*kortene* も *kort* [カード] に複数語尾 *e(r)* と定冠詞 *ne* がついた形であり、*korderne* は *korde* [(数学) 弦] + (e)r + *ne* である。従って、この語対では、*vært*, *kort* は一音節語、*verden*, *korde* は二音節語である。(しかし、[r] をもつ語が全て一音節語であるとは限らない。)

通時音韻的にみて、母音の後の *p, t k > b, d, g; d > ð; g > r* の発展はすでに1100年頃には始まっており、どんなに遅くとも1300年頃には終っており、*stød* も又この頃までに確立していたと言われる (Skautrup, p. 228 ff. 参照)。

語彙的に、この無声の [r] をもつ語は本来語とは限らない。例えば、*morter* [モルタル] (*morder* の [r] に対する)、*marsch* (*marsj*) は中世 (後期)、近世の借入語であり、その点では「本来の」/p, t, k, f, s/ などとは関係がない。*Diderichsen* は、短母音 +/r/ ([r]) +/f, s/ あるいは字母 *p, t, k* を含む語は外来の語が殆んどであるが、音韻的振舞いは本来語的である、と言っている。

以上述べた限りでは /r/ の無声化は (「本来の」/p, t, k/ というより) 字母 *p, t, k* 及び音素 /f, s/ (同時に字母 *f, s* でもある) に関連するとみられる。しかし、これが綴字発音であれ、何であれ、「声」の逆行同化と言えるかもしれない。これに関連して、*Hansen* (p. 79 脚註) は、逆に、「本来の」有声子音の前に起る *r* が無声化することがあり得る、と述べる。例えば、今日 (1954年) のラジオのアナウンサーは一貫して *verden* を [ˈvɛɾdɛn] と発音する、と言う。このように発音するのは、いずれにしろ年輩のアナウンサーだと思われるが、もしこれが事実ならば、(先行母音が短母音であるということは別として) 後続音の先行音 /r/ に対する影響、即ち逆行同化は、この限りではそれほど説得力がない。この場合はむしろ音節末の [r] は無声化するという風に考えられるのではないかと思う。

§3.3. 構造的にみて, [r]:[ɾ] は /r/:/ɾ/ なのか, /rd/:/rt/ (/rb/:/rp/, etc.) なのか。

Martinet (1937) は語中で /ə/ の前では p:b, t:d, k:g の音素的対立は中和され, p/b, t/d:ð, k/g:r の対立となるとする。そこで, Martinet は /ð/ と /r/ を (語頭に現われない) 音素として立てる。従って, 問題の *værten:verden* のような対立があるなら, /r/ と /ɾ/ を立てなくてはならないが, [r]:[ɾ] は一般性がないと言う。

又, もし /r/ と /ɾ/ を立てたとき, 問題の位置以外に現われる r 音はどうなるだろうか。語頭の /r/ は無声化することがよくある。また語末の (そして恐らく語中の音節末の) /r/ は, もし母音化されなければ, 有聲の [r] から無聲の [ɾ] (I. P. A. [ɹ], [ɻ]) までの凡ゆる有聲度が現われる。これらの異音は /r/ と /ɾ/ を立てた場合, どちらの音素に属するのか。

一般に, デンマーク語音韻論では, 音節中での位置を考慮して, 閉鎖音を次のように分析する:⁽¹⁰⁾

/p/: [p-],
/b/: [b-], [-b(-)],
/t/: [t-], [-d(-)],
/d/: [d-], [-ð(-)],
/k/: [k-], [-g(-)],
/g/: [g-], [-r(-)].

本来語で /rd/ は /-rd/ の場合は /d/ は普通発音されないが, 代わりに stød が入る。/Vd(ə)/ の場合は, /d/ は [ð] となる。/-r・d-/ (・は音節境界を示す) は /-r/ が音節末, /d-/ が音節頭で, /d-/ は [d] となるというわけである。(これに準じたことが, /r/ のみでなく他の有聲子音 (/l, n/) にも, また [g] - [ɾ] にも言える。⁽¹¹⁾) 実際にはもっと詳しい規則が必要。

このように考えると, /p, t, k/:/b, d, g/ は /ə/⁽¹²⁾ の前でも対立があることになる。そして, (二音節以上の語において) /r(・)t/, /r(・)p/, /r(・)f/ etc. に先ず「声」の逆行同化⁽¹³⁾ を適用し, その後で弱強勢位置の /p, t, k/ を [b, d, g] とする。このような規則及びその順序は甚だ生成音韻論的である。

今, 語中で /rt/:/rd/ etc. のような対立があるとした場合, 一つの規則の適用範囲がより広

(10) Uldall (1935), Hjelmslev (1951) その他参照。

(11) Basbøll (1969; 1971; 1972) 参照。

(12) Hjelmslev は [ə] を強勢のない /ɛ/ と考える。尙, *ledig, stadig* etc. の [ð] は, (少なくとも音声的) 音節頭に現われると思われ, 上の音素分析 (/d/ = [d-, -ð]) には検討すべき点がある。

(13) 有気・無聲の /p, t, k/ と無聲の /f, s, (h)/ が無気・無聲の /b, d, g/ 及びその他の (有聲) と区別される音声特性をもつと仮定して。(拙論 (1973) 参照。)

くなる。stød は音聲的に有声音であるもの（有声子音、母音）にしか起らない。⁽¹⁴⁾ 強音節中で、そこに長母音があるときにはその母音に、短母音には起らないが、短母音＋有声子音のときは有声音に stød が起り得る。（*verden* には stød が起っていないことからわかるように、上述条件の有声音（また長母音）に必ず stød が起るわけではない。）動詞の命令形が短母音＋/r/＋子音をもつ場合、その子音が /p, t, k, f, s/（あるいは字母 *p, t, k, f, s*）のときは /r/ に stød は起らない（*stødt ! verfi !*）が、その他の子音の場合には /r/ に stød が起る（*myr'd ! hver'v !*）。

形態音韻論的に、例えば、形容詞 *grøv* が複数形で *grøve*、単数中性形で *grøft*、動詞不定形 *håve*、過去分詞形 *håft*（-t は過去分詞語尾）というような対応がある。

これらのことは、その原因が（形態）音韻・音聲的であれ、綴字発音であれ、声の逆行同化があること、いや、あったことを確かに示している。

いずれにしろ、「保守的な」RMにおける「声」の逆行同化らしきものが、共時的音声現象として、他の有声子音には現われず、/r/ にしか現われなければならないことは、デンマーク語の /r/ の特異な位置を示す一事実である。⁽¹⁵⁾ しかし、上述の stød の規則、形態音韻論的規則があるとは言え、音聲的単位である（語中・語末の）[r] は本当に存在するのであろうか。

§3.4. Hansen(p. 78 f) によれば、非ユトランドRMでは確かに有声の *r* しか現われないが、*verden : værten*, *myrde : myrte*, *korderne : kortene*, *morder : morter*, *verber : værper*, *hjørde : hjorte* などでは、本来の *d, b* と結合した場合、その第一音節は、対応の本来の *t, p* をもつ語におけるより長いことが屢々である。しかし、この場合、*r* が長いのか、先行の母音が長いのか、どちらとも決めがたい、と言う。又、コペンハーゲンRMで、二音節語には確かに有声の *r* が一貫して用いられる：*marker, marked, martyr, aparte, skarpe, kirke, første, hurtigt*, etc. これに対し、一音節語では有声、無声の両者が起るように思われる：*mark, barsk, skurk, bort, kort, harsk, march, marts*, etc. しかし、ここでも有声の *r* が優勢になりつつある、と述べている。

ここで問題となるのは、上例中の *r* がいずれも音節末に起っており、その場合有声の *r* というのが母音的 *r* とどの程度に違うのかということである。もし母音的 *r* ならば、/r/ は先行母音と融合するか、二重母音の第二要素となり、無声化は起らない。

(14) このことはRMの種類は問わずとも、明白な事実である。従って、§1.5. で例示した *Spore* の *falk* [fal'g] の [l] が無声化するというのは信じがたい。註15参照。

(15) しかし、Hansen (p. 80) のような記述もある：*l, m, n, (j)* の無声化に関して、無声子音の前で、例えば、*alter, Alperne, hal's, fal'k, enten, hilsen* などの語にDOは有声子音のみを考慮に入れるだけだが、或る程度の無声性がこの環境の流音、鼻音にはっきり認められる。しかし、コペンハーゲンRMでは、この種の無声化は起らない。以上のように言う。

§3.5. /r/ は子音と分類される音素の中で、音声的にもっとも母音に近い音である。⁽¹⁶⁾ 現在の (コペンハーゲン) RMでは、/r/ は音節頭に現われる場合は子音的 [ɹ] (I. P. A.) で、音節末に現われるときは母音的 [ɹ̥] である。⁽¹⁷⁾ [ɹ̥] は語頭では無声化することがある。

§2.2. で示したように、DO (及び Jespersen) では母音的 *r* が実際に表示されることは事実上大変稀である。Hansen (p. 75) は、DOが発音表示規則を定めた当時、この母音的発音が、*lærer*, *grosserer* などの *-rer* という弱音節を除いてはまだそれほど一般的でなかったのだらうと、DOを弁護(?) するが、Diderichsen (p. 55) は、そんなことはない、Jespersen はすでに *Fonetik* (1897—99, p. 432) で *r* は凡ゆる位置で母音的だと言っているのではないかと、Hansen の考えを評している。Hansen (p. 79) 自身も、Jespersen (¹1906) が母音的 *r* を認めている (§2.2.1 参照) ことを述べている。

Grove はすでに言及したように、無声の *r* は方言的だと言い、(コペンハーゲン) RMでは音節末の *r* は全て母音的である、という。この Grove の論文はすでに1927年に発表されている。その翌年、Uldall は、Grove の言い分は極端だとして Jespersen を支持しようとするが、彼も (そして Hansen も) ユトランド出身である。大勢としては、母音の後の /r/ は母音的であることに間違いない (Grove (1927), Andersen (1954), Diderichsen (1957), (Koefoed (1964)), Andersen (1965), Spore (1965), Rischel (1968), Basbøll (1968; 1969; 1972), そして Hansen (1956), その他)。

Basbøll (1972, p. 196 f.) は、/r/ は音節末では [ɹ̥] (先行母音と融合しない場合)、音節頭では [ɹ] であるが、音節末で、弱強勢母音が後続するとき、[ɹ̥] の代わりに、[ɹ] が現われることがある、と言う。そして、「進歩的」コペンハーゲン RMの [sguəsbelv^henə] と「保守的な」(コペンハーゲン) RMの [sguəsbelv^henə] (*skuespillerinde* ← *skuespiller* + *inde*) では音節の切れ目に違いがあるという。

/rt/ などの /r/ が無声の [ɹ̥] であったのが有聲の [ɹ] になり、更に [ɹ̥] になった結果、次のようなことが起った。§3.3. で述べた命令形では短母音 + /r/ + 「無声」子音音素或るいは字母をもつとき、stød は起ら なかったが、今や次のようになった (Basbøll (1969, p. 39)):

	「保守的」RM		「進歩的」RM
<i>styrt</i> !	[sdyɾd]	→	[sdyɹ̥d],
<i>skærpe</i> !	[sgɛɾb]	→	[sgæɹ̥b],
<i>mors</i> !	[mɔɾs]	→	[mɔɹ̥s].

(16) Hansen (p. 75) は “/r/ + 母音” と “母音 + /r/” は、特に弱音節で誤って聞かれることが稀でないとして、次のような例を示す: *ru^hin : u^hrin*, *Kir^hstine : Kri^hstine*, *gar^hdere : gra^hdere*.

(17) 音節末 /r/ ([ɹ̥]) は短母音の後にのみ現われ、短母音を第一要素とする音声的二重母音の第二要素となる。但し、子音的 [ɹ] の現われるRMではこのようにはならない。この他、音声的二重母音には [i], [u] で終るものがあるが、音韻的には “母音 + 子音 (/j/, /g/ (または /r/), /v/)” と解釈される。
(Rischel (1968; 1970), Basbøll 諸論文参照。)

しかし、この「進歩的」RMでも /r/ の後に必ず stød が起るようになったとは言えず、例えば、*mærk!* (「保守的」RMの [mæg]) は [mæpʔg] より [mæpg] の方が普通であると Basbøll はつけ加えている。この「進歩的」RMは、若い Basbøll 自身のことばであるが、コペンハーゲンの若い(方)世代のRMに大体一致する (Rischel (1968) 参照)。

§4.1. §3.で述べたことをまとめてみると、「保守的」(それも非常に「保守的」なのだが) あるいは方言色を多少もつRMに起こる無声の *r* は、その他のRMでは有聲の *r* か母音的 *r* である。そして特に後者の場合が多く、「進歩的」RMでは(殆んど)常に母音的 *r* である。従って、無声の *r* が現われないRMでは「声」の逆行同化を示すものはないことになる。そして、逆行同化は通時的所産である形態音韻論的対応にその跡をとどめるのみということになる。つまり、音声的な、即ち *commutation* を促がさない「声」の逆行同化は音声学的に記述される必要があるほどには顕著ではないと思われる。

§4.2. もう一つの問題は、RM即ち「標準語」とは何かということである。

Grove, Diderichsen その他は、Jespersen, DOなどの記述はユトランドRMが中心になっているという。Andersen (1965) によると、Koefoed (1964)⁽¹⁸⁾ では彼がボーンホルム出身のためRMを聴覚音声的に分析するのが確かではなく、その結果が彼の分析・記述に現われているとのことである。又、Diderichsen は Hansen がコペンハーゲンRMを完全には掌握していないと言う。しかし、Andersen (1965, pp. 82—83) (彼自身はフューン島出身) は言う。誰でも或る特定の言語社会の成員であるから、その育った社会の言語が何らかの形で各個人の言語に入っているだろう。だから、Diderichsen がいうほどには何か「上等の」概念としてのRMがあるかどうか必ずしも確かではない。Diderichsen の「定義」によれば、この「上等の」概念としてのRMは「方言に影響されずに何世代も伝えられてきた言語社会で話される、自由な、自然なバリエーションをもつRM」であるが、Diderichsen 自身こそこのRMの最良の代表者であった、と、Andersen は多少皮肉をこめて結んでいる。

デンマーク語では、ある意味では、標準口語を唯一つの形に定めようとはしていない。より「保守的」、より「進歩的」な要素、背後にある方言的要素などがからみ合って、いくつかのRMが形成されているようであるが、大勢としてはやはりコペンハーゲンを中心とするRM (「保守的」、「進歩的」RM) が、いわゆる「標準語」の代表と思われる。

我々がデンマーク語の音韻論・音声学を参照するとき、どこ出身の誰がいつ書いたものかを出るだけ知っておく必要があるようである。

(8/73)

(18) Koefoed は *Teach Yourself Danish* 1958 の著者。

文 献

- Andersen, Poul (1954): *Dansk Fonetik*. Chap. XV of *Nordisk Lærebog for Talepædagoger*, Copenhagen.
- (1965): “Om det finale *r* i dansk”, *Danske Studier*, 75—84.
- Basbøll, Hans (1968): “The phoneme system of Advanced Standard Copenhagen”, *Annual Report of the Institute of Phonetics University of Copenhagen (=ARIPUC)* Vol. 3, 33—54.
- (1969): “Notes on the phonology of Danish imperatives with a digression on vowel quantity”, *ARIPUC* Vol. 4, 15—42.
- (1971): “A commentary on Hjelmslev’s Outline of the Danish Expression System (Part I)”, *Acta Linguistica Hafniensia* Vol. XIII, No. 2, 173—211.
- (1972): “Some conditioning phonological factors for the pronunciation of short vowels in Danish with special reference to syllabification”, *ARIPUC* Vol. 6, 185—210.
- Diderichsen, Paul (1957): “Udtalen af dansk rigssprog”, *Danske Studier*, 41—79.
- DO (1918—1956) = *Ordbog over det danske sprog* 28 vols., Copenhagen.
- Ege, Niels (1965): “The Danish vowel system”, *Gengo Kenkyu* Vol. 47, 21—35.
- Fischer-Jørgensen, Eli (1952): “Om stemthedsassimilation”, *Festskrift til L. L. Hammerich 13 juli 1952*, 116—129.
- (1962): *Almen Fonetik* 3rd ed., Copenhagen.
- Grove, Peter (1927): “Det danske udlyds-*r*”, *Danske Studier*, 155—161.
- Hansen, Aage (1956): *Udtalen i moderne dansk*, Copenhagen.
- Hjelmslev, Louis (1951): “Grundtræk af det danske udtrykssystem med særligt henblik på stødet”, *Selskab for nordisk filologi, Aarsberetning for 1948—49—50*, 12—24.
- Jespersen, Otto (1906; 31934): *Modermålets fonetik*, Copenhagen.
- Koefoed, H. (1964): “Er det finale *r* en vokal i rigsdansk?”, *Danske Studier*, 85—112.
- Martinet, André (1937): *La phonologie du mot en danois*, Paris.
- Rischel, Jørgen (1968): “Notes on the Danish vowel pattern”, *ARIPUC* Vol. 3, 177—206.
- (1970): “Consonant gradation: A problem in Danish phonology and morphology”, *Proc. Int. Conf. Nordic and Gen. Ling. 1969*, 460—480.
- Skautrup, Peter (1944): *Det danske sprogs historie* Vol. 1, Copenhagen.
- Spore, Palle (1965): *La langue danoise*, Copenhagen.
- Uldall, H. J. (1928): “Det danske *r*”, *Danske Studier*, 172—175.
- (1935): “The phonematics of Danish”, *II. Int. Congr. Phon. Sc. 1934*, 54—57.
- 間瀬英夫 (1973): 「デンマーク語の閉鎖音」 *IDUN* 1, 3—23.